

ロードマップ及び単元デザインから始める倫理の授業

—生命倫理において人間の生を考察する課題探究学習—

愛知県立安城高等学校 稲吉 徹

1 研究の実際

(1) 科目の目標

学習指導要領で「倫理」においては、次のようにある。

人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念に基づいて、青年期における自己形成と人間としての在り方生き方について理解と思索を深めさせるとともに、人格の形成に努める実践的意欲を高め、他者と共に生きる主体としての自己の確立を促し、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。

次の二点が重視されたと考える。一つは「生命に対する畏敬の念」を強調し、公民科「倫理」が生徒の心の教育を担う重要な科目であるとの特色がいつそう明確化されたことである。もう一つは「他者と共に生きる」点に焦点が当てられ、「個」としての自己だけでなく、他者と共に生きる存在としての自己の確立を促すことに重点が置かれたことである。

(2) 「期待する生徒像」、「科目を通して身に付けさせたい力等」

倫理では、次の三つを期待する生徒像に設定する。

ア 自他を大切に扱う心を忘れない生徒

人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を前提として物事を考えることができる。

イ よい生き方のモデルをもち、それに近づこうと努力する生徒

倫理的課題と向き合い、先哲の生き方等を拠り所として自身の在り方生き方を論じることができる。

ウ 自己中心的ではなく、良識ある行動をとることができる生徒（納得解に基づく価値観を有している生徒）

自己自身の価値観を形成しながら、社会の一員として他者と共に生きる主体としての自己の確立を図ることができる。

課題探究学習までの学習内容において、常に少なくともいずれか一つは意識をして授業を展開するように心がける。なお、ウに示す「納得解」とは、学習指導要領が強調する「他者と共に生きる」視点を踏まえた、独り善がりに陥らない客観的認識のことである。

(3) ロードマップ ※ 資料編参照

倫理の授業では、次の二点について常に吟味しながら構想している。第一に、自他の生命を尊重する人間、理想的な在り方生き方を目指そうとする人間、他者と共に生きる人間を育てようとしているのか。第二に、先哲の思想を取り上げて、生徒が自らの生命を主体的に生きようと思ひ直し、思索を深める気付きがあったのかという二点である。それ故、指導者自身が、それらの吟味を怠ることなく授業に臨むことが肝要である。また、授業の形態では「倫理学史」や「思想史」を扱う場合に在りがちな一方的な説明に終始するのではなく、それぞれの学習内容において、先哲の思想に触れながら、自ら思考する学びの機会を設定することを重要視した。これらを通して、生徒が独り善がりに陥らない価値観や道徳観を形成し、現代を生きる人間としての思索を深めさせるところに「倫理」が期待す

る着地点があると考えからである。これらを踏まえて、期待する生徒像を目指し、全体の指導計画つまりロードマップを作成した。

(4) 単元デザイン ※ 資料編参照

ロードマップを見て、課題探究学習を含めた三つの単元を抽出し、以下のように作成した。

単元デザイン(1) 現代に生きる自己の課題「自己への問い」

単元デザイン(2) 現代と倫理 ア 現代に生きる人間の倫理「④自己実現と幸福」

単元デザイン(3) 現代と倫理 イ 現代の諸課題と倫理「課題探究学習Ⅱ」

単元のねらいを明確化し、学習内容と生徒に身に付けさせたい力等の育成のために「単元を貫く問い」及び「授業の核となる問い」を設定し、生徒には問いを授業開始時に提示した。単元を総括する時点で生徒に身に付けさせたい力等であるゴールが何であるかを想定し、それを獲得させるためにどんなスモールステップが必要かを逆算して各授業内容を構想している。単元を貫く問いと期待する生徒像を常に意識することで、年間を通した授業計画に一貫性を持たせたいと考えた。

2 研究授業

(1) 単元構想 (*Ⅲ 資料編 倫理 単元デザイン3 参照)

授業は、学習指導要領の大項目「(3) 現代と倫理 イ 現代の諸課題と倫理」において実施した。「内容の取扱い」には、「倫理的課題を自己の課題とつなげて探究する活動を通して、論理的思考力や表現力を身に付けさせる」とある。自分自身の在り方生き方を問い続ける姿勢を育むと同時に、独り善がりでない納得解に基づいた価値観の形成こそ、「倫理」の目指す最終的なゴールであろう。倫理の授業を通して自分自身の確固たる人生観や価値観を形成しながらも、それが社会集団と切り離された考え方に陥らぬように、自らの生命に関する客観的認識から、いかに生き、そしていかなる人間になることを目指すかを主体的に自覚させることが重要だと考える。そこで授業実践は、次のように構想した。

- ① 昨年多くのメディアで取り上げられた「アメリカのメイナードさん（以下、Mさん）のメッセージ」を基に単元を構想し、人間の生と死や命の所有者、個人の尊厳等について考察させる。
- ② 学習方法として、班による協議や調べ学習を通じた、発表する活動に毎時取り組ませる。
- ③ 班での活動については、1班4人で編成し、教室での協議及び自由テーマの調べ学習と発表も同一班で取り組ませる。本授業実践は、第3学年の2クラス（理系）において実施する。
- ④ 問いについて考察する際は、既に学んだ先哲の思想を手がかりにしながら自分の考えを整理した上で、他者との意見交換等を通して得た考えをワークシートにまとめさせる。
- ⑤ 特に毎時の振り返りでは、自分自身の考えの変化に着目させる。
- ⑥ 倫理的な見方・考え方をいっそう深めさせる活動を設定し、自ら主体的に現代的課題を捉え、適切な価値判断ができるように検討させる。

(2) 学習指導案

1 教科・科目	公民科（倫理）
2 単元名	現代の諸課題と倫理
3 単元の目標	倫理的課題を自己の認識とつなげて探究する活動を通して、現代に生きる人間としての在り方生き方について自覚を深めさせる。
4 単元を貫く問い	【「生きる」とは、「死ぬ」とは、どういうことなのだろう】

5 単元の指導計画（全4時間）

小単元	○学習内容・◇小単元の問い・主な学習活動
1次（1時間）	○課題の提示と問題認識の共有 ◇ 自分の死を自分で決定することは許されるか ・Mさんのメッセージを基に作成したワークシート「私は、11月1日に死にます①」（倫理13ページ資料7）により、死の決定権について考察する。
2次（1時間）	○問題の捉え直しと考察の深化 ◇ 尊厳死という「命の処分」は、許されるのか ・ワークシート「私は、11月1日に死にます②」（倫理15ページ資料9）を基に、「自分の命」は誰のものか考察する。
3次（2時間）	○自由設定テーマでの班の調べ学習・協議・発表 ◇ 人間のふさわしい在り方生き方とは何であるのか ・各班で生命倫理に関わる課題を一つ設定し、倫理的視点に立って、人としての在り方生き方について考察する。考察結果について発表する。

6 本時の展開

(1) 第1次

	学習内容	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の場面◎ 評価の観点
導入 10分	尊厳死	◇ 自分の死を自分で決定することは許されるか ・アメリカのMさんの尊厳死について概要を知る。	・Mさんの選択についての善悪に言及しないよう留意して、概要を説明する。	
展開 35分	尊厳死の賛否	・Mさんの選択について、自分の考えを記述する。 ・ワークシート（倫理14ページ資料8）を班の中で回覧し、他者の意見に対する自分の意見を2行程度で書き込む。 ・Mさんの選択について、「問題提起すべき点」を班で1つ考えて、紙フリップにまとめる。	・Mさんの選択について、自分の率直な思いが書ければよいと強調する。 ・自分の考えをまとめたワークシート（資料8）を班で回覧させる。 ・他者の考えを読んで、それに対する自分の意見（共感、疑問、指摘などさまざまな観点で）を2行程度で記述するよう指示する。 ・班で上手にタイミングを見て回すよう指示する。 ・Mさんの選択に対して、班での意見をまとめさせ、発表のための紙フリップも完成するよう指示する。	

		<ul style="list-style-type: none"> ・全体の場で発表する。聴き手の際は、聴く姿勢を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体の場で発表させる。発表を聞くときは聞く姿勢を作るように指導する。 	
振り返り 5分	自らの考察の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りにより、授業を通じた自分の考えの変化を知る。改めてMさんの選択を考えたとき、授業の始めと終わり、自分の考えにどんな変化があったかについて記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りをさせ、自分の考えの変化に着目するよう強調する。 	◎考察の記述内容 【思考・判断・表現】

(2) 第2次

	学習内容	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の場面◎ 評価の観点
導入 8分	尊厳死に対する他者の考え	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の一部生徒のコメントを読む。 ・前回の肯定的な意見数と否定的な意見数を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の肯定的な意見数と否定的な意見数を伝え、その数の変化にも注目させる。 	
展開 37分	尊厳死を希望する主体の切り替え	◇ 尊厳死という「命の処分」は、許されるのか		
	自殺と尊厳死のちがい	<ul style="list-style-type: none"> ・Mさんが尊厳死を希望した場面を、今度は「自分の父親(または母親)」が希望したと置き換えても、前回と同じ判断ができるか(倫理15 ページ資料9)、自分の考えを記述する。 ・Mさんの尊厳死は、本当に尊厳死と言えるか、考える。 ・死の自己決定権について、①命は誰のものか、また②先哲の思想を手がかりとして、それを認めてもよいか否かについて班で検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・Mさんの選択を“別のシチュエーション”で捉え直し、自分の考えを記述させる。 ・意見を記述する際、前回と考えに変化がある生徒には、「何が異なるか」を意識させる。また考えに全く変化がない生徒は、その価値判断を支える思想的な裏付けについて意識させる。 ・前回の記述から、Mさんの死について、その本質に着目させる。ただし、言葉の使い方や授業の流れについては、特に配慮する。 ・自ら命を処分することは許されるか、班で検討させる。 	

		し、フリップ（倫理 15 ページ資料 9）にまとめる。 ・全体の場で発表する。聴き手の際は、聴く姿勢を作る。	・発表のためのフリップも完成するよう指示する。 ・発表を聴くときは聴く姿勢を作るように指導する。	
振り返り 5分	自らの考察の変化	・振り返りにより、授業を通じた自分の考えの変化を知る。死の自己決定は個人の自由といえるかに注目し、授業の始めと終わりで、自分の考えにどんな変化があったかについて（倫理 16 ページ資料 10）記述する。	・振り返りをさせ、自分の考えの変化に着目するよう強調する。	◎考察の記述内容 【思考・判断・表現】

(3) 第3次前半（1 / 2時限目）

	学習内容	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の場面◎ 評価の観点
導入 4分	自由テーマ研究	◇ 生きるとは、死ぬとは、どういうことなのか		
		・本時の流れを知る。（倫理 17 ページ資料 11 参照）	・設定した課題に対する班の見解を先哲の思想を手がかりに考察し、人間の適切な生き方について提案できることがねらいであると指示する。	
展開 40分	〈テーマ例〉 ○脳死 ○代理母 ○クローン技術 ○動物の権利 ○人工授精 ○人工妊娠中絶 ○遺伝子操作 ○延命治療 ○生きることは義務か	<ul style="list-style-type: none"> ・班で生命倫理に関して興味のあるテーマを1つ設定する。 ・班員で役割分担をして、調べ学習をする。 <ul style="list-style-type: none"> ● 文献やインターネットを利用し、テーマについて調べる。 ● 発表用のワークシートを作る。 ● 教科書・資料集を参照して考えをまとめる。 ● 発表用の原稿を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマを決めたら報告させ、適切なテーマ設定ができたか、チェックする。 ・短い時間で効率よく進められるよう留意させる。 ・文書作成やコンピュータの操作について、適切に指導する。 ・調べ学習で行き詰まった班に対して、適切な文献例やフレーズ等を知らせる。 	

		<ul style="list-style-type: none"> 調査活動と並行して、調べたことを整理し、ワークシートを班で作成し、発表の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表時に使用するワークシートを各班1枚作成し、調べたことを伝わりやすく解説できるよう工夫させる。 	
まとめ 6分		<ul style="list-style-type: none"> 本時の成果を班で確認し、次回の発表の流れを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートが未完成の班は、次回までに提出するよう指示する。また発表における班で役割分担を確認させる。 	

(4) 第3次後半 (2 / 2時限目)

	学習内容	学習活動 (生徒)	指導上の留意点 (教員)	評価の場面◎ 評価の観点
導入 2分		◇ 人間のふさわしい在り方生き方とは何であるのか		
		<ul style="list-style-type: none"> 本時の流れを知る。 発表者のときは、調べたことや考察したことを全体場で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各班のワークシートを印刷の上、配付し、本時の流れと発表の留意事項を説明する。 発表時間を各班3分程度とし、厳守させる。他の班が聞き取りやすいように必要に応じて、適宜助言する。 	
展開 43分		<ul style="list-style-type: none"> 聴き手のときは、評価票(倫理18ページ資料12)に意見や疑問等を記入する。 発表に対して質問や意見があれば挙手をする。なければあらかじめ決められた班がコメントをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表が終わったときに、聴き手に対して、評価票を記入する時間を与える。 自発的に質問が出るように、各班の発表の要点を復唱し、考えさせたい箇所を暗示する。 	
振り返り 5分	尊厳死のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> 発表を通して、また4時間の授業を通して、生命に関する自分の考えの変化や、認識の深まりについて、ワークシートに(倫理18ページ資料13)記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> 4時間を通した全体の振り返りを意識させる。 生徒を誘導しないよう内容についての評価を控える。一方、発表の様子やこれまでの準備の様子を総括し、全体に向けて評価できる点を知らせ、今後の学びにつながるよう配慮する。 	◎考察の記述内容 【思考・判断・表現】

7 評価規準 【思考・判断・表現】

生命倫理の課題を通し、自他の命の尊さに気づき、他者と共に現代社会に生きる人間としての自覚を持ち、自らの在り方生き方について思考を深めることができる。

(3) 実践のまとめと考察

倫理での学びを、単なる史実や言葉・概念として理解するに留めず、生徒自身が自分の生き方なり方を吟味する思考の枠組みをもてるようにするには、どんな授業を構成すべきかという課題意識が常に念頭にあった。遠い国の「誰か」なら許容できることでも、自分の身内の事態となると判断が変わってくる。その差異はいったい何であるかを検証しながら、生命にまつわるさまざまな問題を自分のこととして認識し、生命の価値に気付かせたい。特に授業においてクラス内で他者と協議する時間や発表の場を多く設定し、他者と意見の交流を通して、生きることの意味や命の尊さに対する自分の認識の変化を捉え、倫理的な見方や考え方をいっそう深めることをねらいとした。死生観をテーマとする上で、配慮の必要な表現や内容も含まれるが、そういった場面もあえて真正面から向き合うことで、よりリアルに生命の尊厳に関する思考を深めさせるように企図している。

ア 第1次（課題の提示と問題認識の共有）

Mさんの事情を汲み取り、初めは78人中69人の生徒がMさんの尊厳死を容認する考えを記述していた。その大半は次の資料1のような意見であった。

【資料1 学習開始時の生徒の意見（一部抜粋）】

- ・「どう生きるかを個人の自由として尊重するなら、どう死ぬかも尊重すべき。」
- ・「J・S・ミルの他者危害の原則から、迷惑をかけずに死ぬなら間違っていない。」
- ・「本人以外の誰かが生きることを強制することはできない。」

これらの考えの根拠には、キリスト教の他者の受容・寛容の精神が働いていた、実存主義の主体的真理を基に何が正しいかは自分で決めるという思想などから裏付けたりしていた。

ところが、班で協議させると、生徒の中から資料2のような意見が出てきたり、それが全体の場に披露されたりしたため、多くの生徒の考えを揺さぶることとなった。

【資料2 協議によって出てきた生徒の意見（一部抜粋）】

- ・「少なくとも正しい行為とは言えない。最後まで（生を）あきらめないことを美德とすべき。」
- ・「わざわざYoutubeにアップして世界に影響を与え、自分の死を正当化しようとしている。」
- ・「尊厳死ではなく“自殺”であって、周りを巻き込んでいる点でたちが悪い。」

第1次の授業の最後に、Mさんの選択をどう考えるかについて改めて同じ問い直しをした（倫理14ページ資料8）。すると、尊重すべきだとする意見は20人、正しくないとする意見は35人、残りの生徒は、よく分からないと振り返っている。このことから学習開始時と比べ、生徒の考え方に変容があったと分かる。

イ 第2次（問題の捉え直しと考察の深化）

今度は、Mさんを遠い国の“誰か”ではなく、自分の母親もしくは身近な誰かに置き換えて考えたとき、Mさんの場合と同じ意見が持てるかを問うた（倫理15ページ資料9）。指導者が授業を構想する際に想定したとおり、多くの生徒は「その選択を受け入れられない」との考えを示した。そこで、「Mさんには容認できたことが、自分の身内となると単純に認められない『差異』とは何か」につい

て問いかけ、班で協議させた。

次に、前時に生徒の中から「Mさんの死は、尊厳死ではなく自殺だ」との意見があったことを受け、テーマとしての取り扱いには十分配慮しながら、「自殺は個人の権利といえるか」についても協議させた。「Mさんには許せたことが、自分の母親だとなぜ認められないのか」、「尊厳死と自殺は何が異なるのか」等について協議していたが、やがて協議に行き詰まりを見せ、膠着状態のような雰囲気が見受けられた。打開策として「命は誰のものであるのか」という視点に着目して意見を出し合うように指示した。咄嗟に提示したことではあるが、この「命の所有者」の視点を意識させたことが、生徒にとっては協議の新たな糸口になった。自分の命は「自分のもの」と言えるかという観点から協議することができた。この協議で出された意見は、資料3のようなものである。

【資料3 「命は誰のものか」についての生徒の意見（一部抜粋）】

- ・ 「個人の自己決定権を認めようという J・S・ミルの他者危害の原則を下敷きにすれば、他人に迷惑をかけない限り、自殺も個人の権利に含めることができる。」
- ・ 「命は家族でつながっている。親や兄弟の同意を得なければ、本人の自由とは言いきれない。結婚のようなもので、別れたいと思っても、配偶者やその家族の同意抜きに自由に決定できない。」
- ・ 「自分の命が世界につながっている。自分が死ぬという行為が、世界の誰かに影響を与える。自分一人の問題で片づく話ではない。」

2番目の意見は、おそらくホブズや J・ロックのような「契約」の概念を思い描いたのであろう。以前授業で、社会契約を扱った際に、「一度契約を結んだ市民が、国家からの保護を受ける必要がなくなった時点で、契約解消を訴え、納税もせず、法律も守りたくないからその国家を離れるという選択は許されるか」と問うたことがあり、これを根拠として考えたと思われる。3番目の意見は、アンガージュマンやコスモポリタニズムを手がかりに書かれている。指導者が教示したわけではなく、生徒自らが先哲の思想を探し出し、自分の意見を裏付けようとしている点で、指導者の企図に合う意見と言える。

一方、反省する点は、咄嗟とは言え、協議において「命の所有者」の視点を指導者自ら示してしまったことである。生徒が気づき、自ら生まれた疑問として、それを基に協議ができていれば、より思考が広げられ、この学習自体に深みが増す契機となったであろう。生徒の気づきから問題の奥深さに行き着けば、人間が生きることの本質にもっと切実に迫れたのではないかと考える。

ウ 第3次（自由設定テーマでの班の発表 前半1／2時限目：調べ学習）

【写真 パソコンを活用して調べ学習する生徒の様子】

生徒は、小・中学生において、多くの教科を通して、調べ学習やグループ協議による学びを経験してきており、その能力を上手に活かせるはずだと考えた。教科書や資料集の内容を整理する学びと併せ、調べ学習の場として、コンピュータ室を使用し、写真のようにインターネットによる情報を適切に収集させた。

それらを基に班の考えとして編集させ、1枚のワークシートにまとめた上で発表する形式をとった。



自由テーマの設定については重複した班があったが、同一テーマでも生徒自身に考察するアングルの再検討を指示したのみで、特に教員から誘導することなく、2クラスともテーマが分散した。調べ学習の成果については、生徒に初めて作らせた成果物（ワークシート）としては、指導者の想定以上の出来栄であり高く評価することができた。

エ 第3次（自由設定テーマでの班の発表 後半2/2時限目：発表）

各班の発表を聞く際に、発表内容について各自が咀嚼する場面を設ける必要があろうと考えた。そこで、他班の発表を聞いて、内容を理解するに留めず、各問題を自分なりに検討し、その是非や倫理的側面の判断を文章化させて自分の中に落とし込むために、生徒間で評価する活動のための評価票（倫理18 ページ資料12）を作成した。これによって、それぞれの生命倫理の諸課題を各自がどう受け止めたかについて確認でき、最後の振り返りの段階で自分の考えを整理し、再構築するのに有効となるだろうと考えたからである。

また、各班3分の発表後、その発表に対する意見や質疑応答を聞く時間を設けた。事前に依頼してあった質疑担当班もしくは聴き手のうち自ら挙手した生徒に、発表に対してコメントをさせた。それらの一部を抜粋したものが資料4である。

【資料4 発表の評価票(資料12)に記述された意見または質疑応答で出された意見(一部抜粋)】

- ・ 【安楽死と尊厳死の違いを報告し、Mさんは当初安楽死をすると宣言したのに、家族の意向で尊厳死へ表現を変えて報道されたことを突き止めた班】に対し、安楽死や尊厳死への同意は世論に左右されていいのか、という質問。
- ・ 【幸せに死ぬか？不幸に生きるか？の観点で延命治療に反対した班】に対して、回復の見込みの有る無しは誰が、誰がどう判断するのか、という疑問。
- ・ 【臓器移植の情報を正しく広め、危篤の患者の命を守る観点で臓器移植に賛成した班】に対して、「脳死」が増えることを暗に期待することにならないか、という懸念。

上記から各班が調べた成果を発表し、それで終始するのではなく、各発表に対してコメントをするという学び合いが、コメントを発した生徒だけでなく、他の生徒にも考えを深める糸口を提供したことが分かる。他班の発表を鵜呑みにするのではなく、自分の価値基準に照らして疑問をぶつけた生徒の視点は、この授業の学びの中で高い照準をもっていることも分かる。生命に関わる諸課題が、いずれも賛否が分かれ、容易に決着の付かない問題であることが、主体的な取組を通して意識されたように感じる。資料5にある振り返りの記述によると、このコメントを交わす場面が生徒を揺さぶったことが分かった。

【資料5 第3次前半の発表に関する振り返りの記述(一部抜粋)】

- ・ 人と意見を交わしたとき、自分とまったく同じ意見はもちろんなく、周りの意見を聞いて、一つの問題でも別の見方を考えたり、自分の考えがずっと深まったりして、今の考えは自分の中でも理由や正当性が最初と大きく違っている。
- ・ 質問の時間で生命問題は実は解決不可能な壮大なものだと思った。生きることは義務ではないと主張した班に、生まれてしまった以上、寿命が尽きるまで生きる努力をすべきなのではと質問したのに対し、生きるのは義務ではなく権利だと即答してすごいなと思った。自殺は単純に禁止すべきだと考える僕たちからすると、権利だからこそ自殺も認めるべきには反論しづらかった。

- ・調べたことをただ発表するだけと思っていたが、質問コーナーで質問されて答えられず、自分たちは（動物の権利について）家でもそれなりに調べてみて、けっこう自信があったのに、根本的に命のことを分かっていないと思い知った。

反省点として、発表の時間が守られなかった点がある。計画では発表には1時間の授業時間を設定したが、いずれのクラスも時間不足となり、発表できない班が出たため、次の時間にも取りまかせざるを得なかった。ただ、発表時間を厳守させるあまり、指導者が途中で打ち切ったり、生徒の発表を急がせたりするような指導は、生徒の意欲を萎えさせてしまうのではないかと考え、時間の管理が甘くなった経緯がある。資料活用の技能を身に付けさせる計画段階で、収集した情報をいかに編集し、伝える内容を精選して表現させるかについて、指導者が適切に企画するだけでなく、生徒にも意識させ、決められた時間内に収まるように内容をより吟味させたり、発表方法にも工夫させたりすれば、生徒の思考を洗練させる可能性となり得るとも気付けた。

この授業の初めに立てた「Mさんの“選択”をどう考えるか」という問いを、発表会を終え、振り返りをする段階で再度記述させた。最初の意見と同じく容認する生徒も、また自分の意見が何らかに変化した生徒も、“授業を通して得た何らかの気付き”を根拠に考察したことが資料6にある記述内容からうかがえた。生命を尊重するという単純な字面ではなく、他者との関わりの中で、より自分の生に対して感じるものが多かったと思われる。

【資料6 第3次後半に記述した4時間を通した授業の振り返り（倫理18ページ資料13）の記述（一部抜粋）】

- ・死ぬなんて全く考えてなかった。進路を考える今、どう生きていくかばかりで、自分がどう死ぬかは今の問題ではないと思っていた。この授業で一番感じたのは僕は明日死んでしまう可能性があるということ。だから今日一日を大事にしなきゃいけないと毎日の有り難さが分かった。
- ・確かに、生きることが義務だから死ぬことも義務だとは言えない。でも生きることが権利で、死ぬことも権利というのも違うと思う。授業のたびにそのことを突き止めようと考えただけど、生きるのは義務、死ぬ権利はないと断定できないモヤモヤ感が残っています。ひとりでは解決できないけど、誰かと関わって生きていくところに、生きる意味がありそうな気がした。
- ・命はみんな平等とか、長生きはいいことだとか、今まであたりまえに思ってきたことが全部吹っ飛んだ。命の価値の発表を聞いて、結局お金で計算できている現実とか、無意味に人生を重ねても生きていくことにはならないとか、違う考え方を聞いて、常識がひっくり返りました。

生徒の記述や活動の様子から、おおむね期待する生徒像へと育ちつつある感触を得た。何より、平素の授業の中では、科目倫理に対して関心が低い様子である生徒が、Mさんのことを自宅でいろいろと調べ、全体の場に「Mさんは当初安楽死をすると宣言していた」という指導者も知らなかった事実を紹介するなど、意欲的な学びの姿も多く見られた。

3 成果と課題

(1) 研究の成果

授業実践を通して、次の三点を確信するに至った。一点目は、倫理の授業において、教科書の内容

を順に追って、分かりやすく解説する講義式の形態も、授業の在り方の一つである。しかし、生徒に思考力・判断力等の力を身に付けさせるためには、授業において指導者と生徒がテーマを共有し、一人だけでなく他者と共に考える場を設定し活動させることが、思考力等の育成のために不可欠な姿勢だという点である。生徒が主体的に取り組む態度や論理的思考力・表現力を身に付けるには、知識・技能を活用する経験を積ませて養うことでしか高められないのではないかとの考えに至った。

次に、とりわけ生徒の思考の過程を明確にするため、工夫したワークシートを作成し、活用する効果である。指導者にとっては、全体の場に向けてメッセージを発することが苦手な生徒の考えやその変容を、ワークシートの記載内容を基に知りうる貴重なアイテムとしての価値である。生徒にとっては、自分の考えを整理できるだけでなく、自分の考えを基に、他者との意見や情報の交換を通して考えを再構築できるツールとなる。生徒の反応が変わっただけでなく、生徒の学びの深まりに効果が高いことを実感できた。

三点目は、科目全体を通した「期待する生徒像」及び「身に付けさせたい力等」を踏まえて授業を企画できたことで、指導者にとって科目としてのねらいを常に意識して、一貫した軸をもって授業実践できたという点にある。これまでも、例えばベンサムらの功利主義であれば『5人を救うために一人を殺してもよいか』とか、フーコーらの構造主義であれば『正常と異常は誰が判断するのか』など、全ての単元において考えさせたいテーマを明示して授業を実践してきた。しかし、それは一単元の中で考察や学び合いの場を提供できたとしても、科目全体を貫くねらいが意識されていたわけではない。各単元で完結するような単発の授業設定であり、学びの連続性にまで意図が及んでいなかった。

ところが、本研究の取組を通して、1年を通し「期待する生徒像」を常に念頭に置き、また生徒に対しても折々に「自分の在り方生き方を考える」「他者と共に生きていく」というフレーズを提示し続けると、生徒自らがその観点で考察できるように変化していった。1学期の授業では主に自分の視点からのみ考察していた生徒が、やがて他者の意見に影響されて新たな考えをもったり、自己を客観視できたりした意見が見られるなど、明らかに授業の方向性に一貫性が保たれているという感触を得られている。ゴールを見据えて授業を構想することが、生徒はもちろん、指導者にとっても、従来の授業の在り方とは違う手応えにつながったという点は、本研究の成果だと認められる。

(2) 今後の課題

期待する生徒像を捉え、その科目の指導の全体像をロードマップとして明確化し、そして単元デザインによる単元構想をした上で、各授業でもねらいを明確にし、生徒に身に付けさせたい力等を鮮明にした実践の積み重ねは有効な手法である。ただ、これを全ての単元において「単元デザイン」を作成し、精緻に評価していくことは、日常の授業では難しい。本研究も、ロードマップに沿った授業こそ意識したものの、単元デザインを基に授業が実践できたのは数箇所に限られる。各学校の実態や生徒の学習状況にも応じて単元デザインには修正も必要である。また、授業者によってもアプローチは変わってくるであろう。授業を計画・実践して、改善点に修正を加えるという繰り返しの中で、科目全体の単元デザインをいかに構成・蓄積していくかは今後の課題と言える。

本研究では、身に付けさせたい力等こそ明示したものの、教員がロードマップや単元デザインを控えているに過ぎず、生徒にそれらを表示していない。生徒に、倫理の授業シラバスとしてそれらを提示し、指導者と生徒間で共有することは有効であろうと考える。

つまり、各単元における学習内容やその単元と他の単元と関係性等が明らかとなり、学習の目標が共有できる。また、各単元の学習を通して、身に付けることができる力等を知らせるとともに、指導者がどんな生徒像を期待しているかを知らせることになる。さらに、生徒が自身の学びについての評

価できる可能性も考えられる。

今後、ロードマップや単元デザインの一部を事前に提示した上で授業を行った際、どのように効果があるのか、提示の有無による効果の差異について実践・検証してみることを課題とした。

科目のまとめとしての課題探究学習において「期待する生徒像」に着地できる、あるいはそのきっかけとなるように授業を展開できるかを追究することが本研究の意図するところである。ペーパーテストでは評価しづらい生徒の活動の様子や思考の内容を基に評価をし、適切に支援・助言しながら、最終的には期待する生徒像にどの程度至っているかを判断する枠組みをもっていることが必要となろう。つまり、具体的な評価方法を作成することも今後の課題となろう。

授業実践を終えると、反省すべき点、修正が必要な点も多々ある。しかし、試行錯誤を繰り返し、指導に悩むということが指導の充実には不可欠な要素であると考え。設定した問いが、あまりにも難解で協議が進まなかったこともあれば、先哲の思想を手がかりにさせようとするあまり、考えるよりも先に、思想家を探して強引に自分の意見に結ぼうという本末転倒な事態にもなったこともある。授業実践を通して見えてきた反省点や修正箇所を素直に引き受けていくことが指導者の指導力向上のための第一歩となる。

4 終わりに

講義形式の授業だけから脱却し、授業の各所に考える場面や振り返りを促す仕掛けを継続的に設定することを念頭に置いて実践してきた。生徒の反応やワークシート、ノートへの記述の変容を追ってみると、授業を重ねるごとに思考力・判断力に深みが増していることが実感できる。思想や哲学を学んだ分だけ、より多くの切り口から倫理的課題を検討できるようになる生徒を見て、目指す生徒像に一步一步近づいていく感触を得た。

倫理の授業を知識理解の習得に傾けるのではなく、先哲の思想を拠り所に、自分の生き方を見つめ直したり、問題解決に向けて考えたりする姿勢をもつことが倫理の着地点である。

課題追究学習で見せた生徒の生き生きとした活動の様子を見て、次年度もいっそう質の高い活動ができるように、それまでの学びがどうあるべきかを真剣に再検討すること、さらには単元デザインを増築し、本研究の意義や魅力について、身近なところから広げていくことを当面の課題としたい。

<参考文献等>

○文部科学省『高等学校学習指導要領解説 公民編』平成22年6月

「私は、11月1日に死にます」①

組 番 氏 名 _____ 評価 _____



【ねらい】 1. 倫理で学んだ知識・考え方を活用し、「死」を見つめることによって生きる意味を考える。
2. 伝える力・聞く力を高め、社会で必要な表現力を身につける。

【評価】 1. 先哲の思想を手がかりに、多面的な死生観をもち、生きる意味を考察できるか。
2. 学び合いを通して、伝える工夫や聞く姿勢、表現力を身につけることができるか。

《授業の流れ》

- 1 時限目：メイナードさんのメッセージから、自らの死の決定の正当性をグループで検討し発表する。
- 2 時限目：1 時限目の取り組みをふまえて、「人間の生」「生きる意味」を検討し発表する。
- 3・4 時限目：「命」「死」をテーマに、グループごとに自由課題を設定し、検討したことを発表する。

《本時の学習活動》

- ①メイナードさんのメッセージをみる
- ②自分の率直な意見を記述する
- ③4人グループを作り、他の3人の意見を読み、それに対するコメントを記入する
- ④4人でメイナードさんの最期を考察し、その意味についてグループとしての意見をまとめる。
- ⑤フリップを黒板に貼った上で、各グループの協議内容を簡単に紹介する(各グループ1分以内)

《メイナードさんのメッセージ》

2014年にYoutubeへ公開。自らカメラに向かって、自分で選んだ「死への思い」を、切々と語った(以下がそのメッセージ)。

たちまち閲覧数上昇、大きな反響を呼ぶ。彼女は2014年1月脳腫瘍と診断。その70日後、「多形性膠芽腫(こうがしゅ)」という悪性のガンと判明し余命半年と宣告。

“Goodbye to all my dear friends and family that I love. Today is the day I have chosen to pass away with dignity in the face of my terminal illness, this terrible brain cancer that has taken so much from me ... but would have taken so much more. ... Goodbye world. Spread good energy. Pay it forward!”

【内容を簡単に和訳！】

《メイナードさんが死を選ぶまで》

ブリタニー・メイナードさんは11月1日に死ぬことを計画している。そして、自分と同じ境遇の他の人々にも終末期の選択肢を広めようと活動している。29歳の誕生日を迎えたばかりの2014年1月、メイナードさんは脳腫瘍の診断を受けた。夫のダン・ディアスさんとは結婚したばかりで、これから子供を作ろうとしていた。

末期がん「安らかな死を」
米女性の選択に波紋が
(写真掲載省略)

“人間らしい最期を迎えたい”

しかし、最初に脳腫瘍の診断を受けてから70日後、メイナードさんはさらに辛い宣告を受けることになる。彼女の脳腫瘍は、多形性膠芽腫という悪性のガンであることが分かった。メイナードさんには余命6か月の宣告が与えられた。「最初は、何かの間違ひであることを祈りました」。メイナードの母、デビー・ジグラーさんは上に掲載した動画でそう語っている。「初めは、X線の間違ひだ、スキャンの間違ひだ、と祈っていました。すべて、事務的なミスに違ひない」と。

数か月にわたる検査の結果、メイナードさんは故郷カリフォルニアで受けられる治療の選択肢には限界があること、また、治療によって残された時間が奪われてしまうことを知る。

「故郷サンフランシスコのベイエリアのホスピスケアで死ぬことを考えました。ですが、苦痛を緩和させる治療であっても、モルヒネが効かない痛みが伴うこともありますし、実際にはさまざまな人格に変化し、言語・認知・運動機能障害に苦しむ可能性があります」。

メイナードさんは家族と共にオレゴン州ポートランドに引越すことにした。オレゴン州には、尊厳死法があるからだ。この法律では、余命6か月未満で責任能力がある成人の末期患者が、医師の処方薬を自己投与して自殺することを認めている。

「薬は何週間も前に処方してもらいました。自殺願望はありません。あれば、ずっと前にその薬を飲んでいました。わたしは死にたくありません」。メイナードはCNNの記事こそう述べている。「ですが、わたしはもうすぐ死にます。だとしたら、自分の思う通りに死にたいのです」。

10月6日、メイナードは終末期の選択肢を広げようと活動している非営利団体「コンパッション & チョイス」と協力し、ブリタニー・メイナード基金というキャンペーンを設立した。このキャンペーンは、全国に広がる尊厳死のニーズに対する認知度を上げるためのものだ。集めた基金は、この目的のために使われる。

「死に直面しながら自分の人生を語るブリタニーさんの勇気や、アメリカ全国民に尊厳死という選択肢を教えるのは、無欲で勇気ある行動なのです」。「コンパッション & チョイス」会長のバーバラ・クームズ・リーさんはそう述べた。「普通の人には、家族で移住し、尊厳死が認められた地域に家を構え、自分の思う通りに旅立つという選択肢を得られるほどの余裕も、お金も、時間もありません」。

上に掲載された動画で、メイナードさんは、苦しむ必要がないと分かっていることで得られるかけがえのない安心感を伝えている。苦しむ代わりに、ベッドの中で大好きな音楽を聴きながら、親しい友人や家族に囲まれて旅立つ選択肢が彼女にはある。「この美しい地球で過ごせる時間が、あとどれほど残されているのかわかりませんが、その時間はできるだけ外に出て、大事な人々に囲まれながら楽しみたいのです。安らかに死を迎えることが、わたしの望みです」。動画は、メイナードさんのこのセリフで締めくくられる。

(写真掲載省略)

《作業Ⅲ》

あなたは、どの班の意見にもっとも共感できたか。理由とともに記述しよう。

班の	に共感しました!
(理由)	

《作業Ⅳ》

今日の授業を通して、「人間の命は誰のものか」「死ぬ権利があるのか」

について、あなたの考えにどんな変化があったかに着目してふり返りをしよう。



《作業Ⅴ》

次回、「人間の命とは何か」「生きているとはどういうことか」「死は、私たちにとって何であるか」といった生命にかかわるテーマを、各班で自由に設定してもらって、研究発表してもらいます。

《次回》PC 室で調べ学習・フリップの完成・原稿の完成・発表準備

《その次》教室で各版の発表（各班 3～4 分程度）

どんなテーマを考えてみたいか、思いつくところを簡条書きで書いてください。

- _____
- _____
- _____
- _____
- _____
- _____
- _____

「私は、11月1日に死にます」③

組 番 氏名

＜ 班 (担当テーマ:) ＞

- 【流れ】
1. まず、班で研究したい「生命倫理」にまつわるテーマを1つ決める。
 2. 役割を分担して、①調べる → ②ミニ・ワークシートを作る → ③発表原稿作成
 3. ミニ・ワークシートは先生がメディアに保存 → 発表の際に配付、ミニ研究発表

《テーマを決めるときの条件》

倫理的な視点で、何か一つ「主張」を盛り込むこと。特に先哲の思想が手かかりとなっていると◎

《テーマの決め方・プリントの作り方 (例) 》

1. 班の考え「自殺を権利として認めるべきだ！」
2. 「自殺を肯定する哲学者はいないのかなあ？」
3. ★★の思想を手かりに、自殺を正当化できるか。
4. 初めて聞くみんなにも分かりやすいプリントを作る。
5. ……という点で僕たちは自殺を個人の権利にすべきと主張

★PCの時間で不足した場合は、各自で仕上げる!

★組●●班 「自殺の権利は、なぜ認められない？」

1. ★★の「自殺論」とは!

自殺は---という行為であって、
-----。これは【 】教に背く…

2. 人間の命とは、誰のものか?

①【 】のものだとすると…

用紙サイズはA4 1枚(表)以内
冒頭は▼組◆◆班と明記する
分かりやすい資料・写真をつける

PC室を使うのは1時間のみ。
完成しなかった場合は、各自で準備し、
授業当日朝までに原稿データを提出する。

《役割分担の例》 もちろん全員で協力すること!

- A. 発表原稿考案・作成係
- B. 資料収集係・ウェブしらべ・文献しらべ
- C. Microsoft Wordでワークシートの完成係
- D. 発表者・板書する係

《上手な発表の例》

- | | |
|--|---|
| <input type="radio"/> 重要ポイントを簡潔にまとめる | <input checked="" type="radio"/> 長い文章でだらだら書き連ねる |
| <input type="radio"/> 図式化したり写真を盛り込んだりする | <input checked="" type="radio"/> 文字だけの授業プリント |
| <input type="radio"/> テストに出そうな用語を空欄にする | <input checked="" type="radio"/> 聞く場面がなく、説明で終わってしまう |
| <input type="radio"/> 教科書や資料集を見れば答えられる空欄 | <input checked="" type="radio"/> 説明がないと探しようのない空欄 |
| <input type="radio"/> おもしろエピソードや笑いのある発表 | <input checked="" type="radio"/> 坦々と説明的に終わってしまう発表 |

《来週の授業で発表》

1. 各班の発表時間は5分程度。調べたことや考えることを、ワークシートを使って説明・主張。
2. 倫理的なポイントはどこかを明確にする。そして「生きる」「死ぬ」のテーマを考える1時間に。

～分かりやすく伝えるメモ～

評価の高い発表・ワークシートの例

- 情報量が多すぎない
- 発表内でも教科書や資料集を上手に活用する
- 聞く人にとって分かりやすい
- 聞きやすさ、考えやすさの工夫がある など

「生きるとは、死ぬとはどういうことなのか」「命の所有者」などの視点で、生命にまつわるテーマを決めよう

候補①

候補②

